

## 『主を迎え入れる』(ヨハ 6:16～21)

イエスが湖の上を歩いて、弟子たちの乗る舟の下へやってきた、という今日の記事は、マタイ福音書にも、マルコ福音書にも記されています。マルコ福音書ではイエスの視点から、ヨハネ福音書では弟子の視点から、出来事が語られています。この記事は、ヨハネの語り方がもっとも簡潔で、元の伝承に近く、それマルコ、マタイと順次に拡大していったと思われます。

弟子たちは、夕方になった頃、湖の向こう側のカファルナウムに行こうとして舟に乗り込みます。しばらく漕いで行くと、突然強い風が吹いて、湖は荒れ始めました。そこへ突然、イエスが現れます。嵐の潮の上を歩いて近づいてきたのです。彼らは驚くと同時に、恐れを覚えました。マルコ福音書は、「幽霊だと思い、大声で叫んだ」と記しています。そこでイエスは、「わたしだ。恐れることはない」と声をかけました。この「わたしだ」の言葉は「幽霊などではなく、わたしである」と言っているように思えるかもしれませんが、神さまが自身を現し示す時の「わたしはある」という重要な意味を持つ言葉なのです。この「わたしだ」という言葉は、旧約聖書において、例えば出 3:14 のように、神さまがご自分を現す際の自己紹介として定まった表現なのです。この物語は弟子たちがイエスは神に等しい者であることに気づく体験でした。マタイ福音書では、この物語の結びに、弟子たちが「あなたは神の子です」と告白しています。「わたしだ。恐れることはない」という言葉は、イエスを信頼していれば困難な目には遭わない、といっているのではありません。イエスが、「神さまと等しい者である私が今、あなたがたと共にいる。だから、畏れるな。」と告げているのです。イエスが共にいるということが、何にも増して重要なことであり、力ある支えとなったのです。

信仰と言うと、「あなたは神さまがいると信じますか」の質問のように、神さまの存在を信じることと考えがちです。しかし、そのようなことではなく、神さまに信頼を置くかどうか、なのです。神さまを信頼せず、自分の力だけで危険や困難などに立ち向かおうとする時、恐れに陥るのです。キリスト者であるとは、「イエスが私たちと共にいてくださる、だから安心だ。」、この安心の中に生きる者とされていることなのです。強風の中でどうにもならなくなった弟子たちにイエスが湖の上を歩いて来たように、私たちが困難に出会った時、イエスは私たちの思いを超えたあり方で近づき、「わたしだ。恐れることはない。」と声をかけ、私たちにイエスが共にいることを思い起こさせ、信仰による平安を与えてくれるのです。イエスは私たちと共にいるのです。大切なことは、私たちの前に姿を現したイエスを、自分の舟に迎え入れることなのです。